

‘The Village’ における Realism

園 部 治 夫

序

詩人 Byron は George Crabbe のことを、「自然を最もきびしく、しかも最も上手に描いた人」といったが、その言葉がそのまま、Crabbe の墓石の碑文として書かれている。しかし、Crabbe 研究の第一人者 Alfred Ainger はその言葉をとらえて、「自然のあまり芳しくない面を最も忠実に描いた人」(1)と、書きかえた方が適切であるだろうと指摘している。

始めの間、Crabbe が接触していたのは自然と人間の両世界の魅力のごく少ない面であったといえるかも知れないが、彼は自分の仲間たちに対しても、変化の多い自然の情景に対しても、決してきびしい態度をとるようなことはしなかった。また、Crabbe に課せられた「貧しい人々の詩人」という言葉も当を得たものであろう。彼は貧しい人々、罪ある人、心の狂った人のことを書く場合、自然の風光を描写する時のように微細にわたり、その観察は正確で、心理描写にも勝れた手法を示している。しかし、真の貧者の友とよべるほどの熱意があつたかは疑わしい。彼はあくまで写実主義、物語作りの詩人の一人であつて、小説界でいえば、Reichardson と同一態度をとっていたといえるだろう。しかし、彼には些かの虚飾もなければ感傷癖もなかったことをみても、彼がロマン主義運動の先駆者といわれたのは当然のことであろう。

I 写実派詩人の観察眼

理知的都会詩人全盛の英国詩壇にも、Thomson や、Gray や Goldsmith の

ように農民の喜びと悲しみを描いた詩人たちがいる。しかし、彼等の描いた自然は、何れも雄大で壮麗、また、幽邃で清新な自然であり、陰気くさい中にもどこか、かおり高い自然であり、それを描写するに当り、ひたすら感嘆と感傷的筆致とによっていた。しかし、Crabbe の自然に対する態度は、それまでとはがらりと変り、野原に茂るありふれた一木一草をもみのがさない綿密な観察で、のどかな春のひばり、猛暑にひびくせみしぐれ、紅葉とみのりの秋の絶景をありのまま描きだしている。このような彼の都会から田園へ逃避しようとする一種の隠遁者的態度は見逃すわけにはいかないが、同時に行き着いた自然のなかで、最も不幸なもの、いわゆる転換期の社会的矛盾を全身にひきうけたような貧しい農民の姿が Crabbe の鋭い観察眼にとらえられるために、彼は存在していたともいえるのである。

さて、このような従来美しく描かれた自然の世界の中から、現実の暗い、醜い、ありのままの姿を、余りにも熾烈な筆でとらえた Crabbe とは、どのような人物であったか、そのひととなりにはしばらくふれてみよう。

薄給の税務署員である父一人だけの収入では、7人家族の生計を支えることは到底不可能であったので、14歳の長男 George は、学業も半ばで、村の医者の家へ見習奉公にやられてしまった。貧農部落の藪医者のもとでは、何ら先の見透しもつかなかったので、17歳になった時、彼は Woodbridge の名のある医院に住みこむことになった。しかし、医術よりはむしろ文学に興味をひかれていた Crabbe は、たまたま手にした Edmund Burke 著の“現代不満の原因”に感銘し、それがきっかけとなって、町の文学青年と交わり、詩作に手をつけ始めるようになった。そこで、彼は医業に見切りをつけ、文学で身を立てたいという唯一つの希望をもって London へ出ようと決心した。しかし、彼には、地方から首都へ通じる道が、既に敗北を喫した青年作家たちにとっては、暗い行進を強いるものであるということが分っていた。それを知りながらも、彼は、牢獄を出てゆく囚人の思いで Aldeburgh を去った。

Crabbe が Burke に最初に送った詩節は、何か特別に創作されたものであったか、または、自分の作品集の中から断片として選ばれたものであったかは、不明であるが、後になってそれには、*The Library* と *The Village* として後世に残った作品の草稿が含まれていたことが明らかになった。(2) また、Crabbe にはその後になって分ったことであるが、Burke が正真正銘の新詩人が登場したことを確信できるようになったのは、彼が次に引用する *The Village* の中の詩行に出会ったからである。その中で、作者は、自分の生れ故郷を去り、賢人、学者のいる都会に出て、運を試そうと決意したことを述べている。それはまた、その時の解放感をも率直に表現したものである。

As on their neighbouring beach upon swallows stand
And wait for favouring winds to leave the land;
While still for flight the ready wing is spread:
So waited I the favouring hour, and fled;
Fled from these shores where
And cried, Ah! hapless they who still remain;
Who still remain to hear the ocean roar,
Whose greedy waves devour the lessening shore;
Till some fierce tide, with more imperious sway,
Sweeps the low hut and all it holds away;
When the sad tenant weeps from door to door,
And begs a poor protection from the poor!

(3)

Burke がこの詩行に深く心打たれたのも当然のことであろう。Crabbe の書いた他の多くの詩作の例をみると、それは、何れも、非常に違った流派の特色が優勢を占めていることが分かる。しかし、ここでは、さしあたり、それよりも新

奇で、時代の先駆をなす型が表われている。また、この詩行には、Goldsmith の *The Travel* や *The Deserted Village* にみられる情緒と韻律とが明白に描かれている。

もしも、Crabbe のこの詩行を Goldsmith の優雅な次の詩行と比較してみれば、その両者の対照が自ずと示唆されるのである。

And as the hare, whom hounds and horns pursue,
Pants to the place from which at first she flew

(4)

Burke の経験豊かな眼は、これが Crabbe の詩作にみられるより以上に Pope 的な二行連句であり、しかも、Pope の作には見られなかったものを見出すとともに、Crabbe のものには、この Goldsmith の詩作に見られなかった心に強く訴えるものを見落さなかったに違いなかるう。

II ‘The Village’ の Realism

Crabbe の初期の作品中、最も重要なものがこの *The Village* である。それは彼が結婚する数ヶ月前の1782年5月に書きあげられている。当時、Wordsworth はまだ幼少ではあったが、後に Crabbe の方からある点で彼に歩調を合わせるようになったのであるが、しかし、その Wordsworth が「詩語法」と称していたものに対しては、改定を加える必要があるかどうか、Crabbe 自身、はっきりした意見をもっていたようには思われぬ。実際のところ、Crabbe は Wordsworth とは違って、Pope 以来の伝統的技法の “heroic couplet” を生涯固守していたので、この *The Village* にも *Lyrical Ballads* にみるような自由で斬新な詩形は見出されないが、物の見方や題材においては、既に新流派を代表する詩人としての面目が現われているといえるだろう。

Crabbe は、推敲を重ねた *The Village* の詩稿を、当時、フランス革命の否

‘The Village’ における Realism

をとなえて全欧州に大きな波紋を投げていた政治家であり、同時に Literary Club の有力な会員であった Burke に見てもらって、その批評を受けたことは前述した通りであるが、更に、稀代の大画家 Sir Joshua Reynolds を通して Dr. Johnson にも見てもらった。Johnson は草稿に手紙をそえて Reynolds に返送した。

拝啓 Crabbe 氏の詩作をお返し致します。これを私は大きな喜びをもって読みました。それは独創的で気魄に溢れた高雅な詩です。私の手入れした部分は、とりあげてくださらなくてもよいのです。それは原作の方が私の改作よりもかえってよい場合がよくあるからです。あるいは、原作と改作をつき合せますと、もっとよい新作さえできるかも知れません。作者は、それが無残にも汚されて返されたと思わなくてもよいのです。ぬれたスポンジでふけば朱筆の部分は全部消されてしまい、どの頁も、もと通りにきれいになります。その「献呈の辞」は余り面白くありません。もっと短くして威勢のよい言葉に書き直した方がよいと思います。Crabbe 氏の御成功を疑いません。敬白

この手紙は1783年3月4日付けになっている。Johnson はその草稿の第15行目から20行目を全部書き改めてしまったが、Crabbe は、言われた通りのスポンジは使わず、最初の4行だけは朱筆のままを用いることにした。その方が原作より勝れていたからである。

On Mincio's banks, in Caesar's bounteous reign,
If Tityrus found the Golden Age again,
Must sleepy bards the flattering dream prolong,
Mechanic echoes of the Mantuan song?
From Truth and Nature shall we widely stray,

Where Virgil, not where Fancy, leads the way?

(5)

ここで Crabbe は真の意味での古典的田園詩——それは既に時代おくれになっているのであるが——に対する蔑視をかくすことができなくなった。しかも、最後の二行連句は Crabbe の方が勝れていたもので、第5行目には朱筆がいてなかった。その二行は次の通りである。

From Truth and Nature shall we widely stray

Where Fancy leads or Virgil led the way?

ここに用いられている“幻想”という語は、“詩的または創造的想像”という極めて不正確な意味に用いられているのであって、そのもとの詩行がいかに優秀であるかを、Ainger も Hudson も同様に認めている。(6) Bowswell は Johnson がこの詩に好感をよせた理由を次のように述べている。

いなかの幸福と美德に関する従来の間違った考えを指摘した Crabbe 氏のこの驚嘆すべき詩の精神に Johnson 博士は全く同感の意を表明したので、博士は少しばかり訂正し、変更するようにといつてくれたばかりではなく、作者の意向を更によく表わすために草稿の用語を書きかえる必要があると思って、わざわざ数行を書き足してくれた。Johnson がこの詩に与えた援助は、Goldsmith の *The Travel* や *The Deserted Village* に与えたものと変りないほど些細なものであったので、作者の大功績を決して損うほどのものではないだろう。(7)

一方、Crabbe の生地では、彼に悪意のある批評をしたものがあり、Bowswell の上記の言葉に反対の意を表明して、「その詩稿は Burke や Johnson によって余りに補修されすぎたので、それが返還された時、その作者にはそれが

分らなかった」と、ささやいたといわれている。

英詩に農村生活を描いたのどこかで人為的な田園詩を普及させたのは、ある程度、Virgil のおかげであるといえるだろう。それも、彼自身が田園詩人であったからであり、また、詩人の受けた靈感が多くの場合、本を通したからでもある。それにしても、Virgil が Theocritus からうけた恩恵は、英国田園詩人が Virgil からうけた恩恵とは、同種のものではなかった。それは、無名詩人は、その恩恵を勝れた方の詩人から受けるからである。同様に Crabbe も先人に比べて見劣りのする Gray や Goldsmith のことを最初は恐らく念頭におかなかったのであろう。Gray の *Elegy in a Country Churchyard* は1750年に完成し、Goldsmith の *The Deserted Village* は1770年に出版された。それはともに農村生活を離れた地点から瞑想し、回顧して描いている。Crabbe はそれを別の見方で眺めた。彼の詩は新鮮な経験が与える鋭い刃をもっていた。

The Village Life and every care that reigns
O'er youthful peasants and declining swains;
What labour yields, and what that labour past,
Age, in its hour of languor, finds at last;
What from the real picture of the poor,
Demand a song—the Muse can give no more.

Fled are those times when in harmonious strains
The rustic poet praised his native plains:
No shepherds now, in smooth alternate verse,
Their Country's beauty or their nymphs' rehearse;
Yet still for these we frame the tender strain,
Still in our lays fond Corydons complain,
And shepherds' boys their amorous pains reveal,

The only pains, alas! they never feel.

(8)

あれ果てた農村の風景と悲惨な農民生活の描写によって Crabbe は先ず従来の美化された田園の歌に対抗し、＜美しい調べで田園詩人がふるさとの野原をほめたたえた時代は過ぎた＞と、過去を回想し、現実を目をむけて、＜今、羊飼いたちは誰一人として、そのふるさとの美しさも乙女の美しさも口ずさむものはないだろう＞と、歌っているが、それは18世紀末の英国における太陽のない村の姿である。そこでは羊飼いは恋の苦しみも味わえないのである。

The only pain, alas! They never feel.

Crabbe の詩は慎重な程反牧歌的である。彼は自分で考えていた田園生活が、同時代の自然詩人の手にかかれば、みせかけで、感傷的な田園風景として描かれているのに強く反発する気を起した。牧草地にも羊の群にも、それなりの魅力はあるが、詩人が＜貧しいが、勤勉なこの土地の農民たちのあとを追いつつ＞始めた時に、＜彼は果して美辞麗句の中に現実の苦しみをかくすことができるだろうか？＞

And see the midday sun with fervid ray,
On their bare heads and dewy temples play;
While some, with feeble heads and fainter hearts,
Deplore their fortune, yet sustain their parts:
Then shall I dare these real ills to hide
In tinsel trappings of poetic pride?

(9)

この自分の質問に殆ど怒りをこめて答えている。

No; cast by Fortune on a frowning coast,

‘The Village’ における Realism

Which neither groves nor happy valleys boast ;
Where other cares then those the Muse relates,
And other shepherds dwell with other mates ;
By such examples taught, I paint the Cot,
As truth will paint it, and as Bards will not.

(10)

このような状況のもとで彼はどこか涼しい人里離れた谷間ではなくて、生れながらに知っていたふるさとの Aldeburgh をそのままの姿で描いている。

Crabbe が *The Village* を書き始めた時、それは明らかに後の作品 *The Borough* と同じように、Aldeburgh とその農村のありさまを描写するのがその意図であった。しかも、この作品が完成しないうちに、Parham だけでなく、Belvoir あたりの情景までがしのびこんでいた。もしも、Book I の始めにある次の詩節が純然たる Aldeburgh を描いているのであるならば、

Lo ! where the heath, with withering brake grown o’er,
Lends the light turf that warms the neighbouring poor ;

(11)

Book II の初頭にある次の詩節は、田園の幸福を明るく描いたものであろう。

I, too, must yield, that oft amid those woes [repose,]
Are gleams of transient mirth and hours of sweet
Such as you find on yonder sportive Green,
The’ squires tall gate, and church way-walk between,
Where loitering stray a little tribe of friends,
On a fair Sunday when the sermon ends :

(12)

‘The Village’ における Realism

これは Crabbe がその後、教区牧師になった Allington の住心地よい土地を描いたもので、そこは、彼が結婚式をあげた後、しばらく滞在していた Rutland 公の居城＜Belvoir Castle＞から植物採集のためよく歩き廻った場所でもあった。

さて、情景を再び Aldeburgh にひきもどしてみよう。

From thence a length of burning sand appears,
Where the thin harvest waves its wither'd ears;
Rank weeds, that every art and care defy,
Reign o'er the land, and rob the blighted rye:

(13)

＜そこにはみのってはいるが、細い麦のしぼんだ穂波がゆれている＞と、荒れ果てた田園が描かれている。それから詩人は、自分が博物学者であったことも忘れて、そこらの山野をとび廻って丹念に雑草を集めては分類した。しかも、どの葉片をとりあげてみても、それはわびしい荒地の思いをつのらせるものばかりである。農作は明らかにつらい仕事に違いないが、詩人がその生れた土地に目をむけていると、光がひらめいて彼を驚ろかすことも時にはあるだろう。しかし、実際はそうではない。それは錯覚であるかも知れない。夏の日射しでさえ、その土地が不毛不作であるという恐ろしい印象を和らげることはできないだろう。それは次の直喩——詩人であれば誰でも日光のできることを一部始終語る時には必ず使用していた一風変った直喩——が示している通りである。

With mingled tints the rocky coats abound,
And a sad splendour vainly shines around.
So looks the nymph whom wretched arts adorn,
Betray'd by man, then left for man to scorn;

‘The Village’ における Realism

Whose cheek in vain assumes the mimic rose,
While her sad eyes the troubled breast disclose;
Whose outward splendor is but folly's dress,
Exposing most, when most it gilds distress.

(14)

果して人々はどうなのだろう。Goldsmith もそのことに関しては何回も書いている。

How often have I bless'd the coming day.
When toil remitting lent its turn to play,
And all the village train, from labour free,
Led up their sports beneath the spreading tree,
While many a pastime circled in the shade,
The young contending as the old surveyed;
And many a gambol frolick'd o'er the ground,
And sleights of art and feats of strength were round.

(15)

しかし、実際は Aldeburgh ではそんなではなかった。

Here joyless roam a wild amphibious race,
With sullen woe display'd in every face;
Who far from civil arts and social fly
And scowl at strangers with suspicious eye,

(16)

ここには農村娯楽というものは何もないが、農民たちにとって、唯一つだけ夕

‘The Village’ における Realism

暮れ時に習慣的に営なまれていることがあった。それは入港した貨物船の積荷をおろす作業であって、しかも、それは人目につかないように、夜明けまでの出航に間に合うようにしなければならなかった。さもないと、難破させられるおそれがあったからである。

How jocund did they drive their team afield!

How bow'd the woods beneath their sturdy stroke!

(17)

これは、Gray が、＜香気のただよう朝のそよ風の音＞にさまされて、自分の目に映った村民たちのことを描いたものである。しかし、Crabbe は野良仕事を違った観点からとりあげている。Gray はその時、雨にもぬれずに教室にいたのであるが、Crabbe はそれを雨の中でみており、＜降っても照っても仕事に励み、年の割には病苦を胸におさめているものたちを見よ＞と、つぶやき、身体を損う程の労働をなげいている。

Through fens and marshy moors their steps pursue,

When their warm pores imbibe the evening dew;

Then own that labour may as fatal be

To these thy slaves, as thine excess to thee.

(18)

Crabbe の描いた農村には豊かな収穫がない。健康もなければ平安もない。町の商人にだまされたり、悪習からぬけきれない農民たちがいる。不健康ながらも、過度な労働をして苦しんでいる青年たちがいる。汚い小屋で美味しくもない、しかも、乏しい食事をしている家族の多いこと、村の救貧院で唯、死を待つばかりの老人たち。これが18世紀末の英国の現実の姿であった。Crabbe が *The Village* の中で描いた風景は、たとえ、彼が真に見たことに対してどのよう

に忠実であったにしても、一般的英国農民で、しかも、最も病弊にあえぐ者たちを立派に描いたものではなかった。それにも拘らず、それは普通の誤りに対する抗議としては恐らく役に立つものであったろう。しかし、それはある特殊な場所を極めて正確に描いたものに過ぎなかった。Crabbe はこのことをある程度知っていたことは、次の引用からでも分るのであるが、彼自身は後年になるまで、それが充分には理解できなかったようである。農民の描写と、その題目を自分独自でとりあげて作りだした独創的な詩行とは、彼の生涯を飾るにふさわしいものである。

Nor you, ye Poor, of letter'd scorn complain,
To you the smoothest song is smooth in vain;
O'ercome by labour, and bow'd down by time,
Feel you the barren flattery of a rhyme?
Can poets soothe you, when you pine for bread,
By winding myrtles round your ruin'd shed?
Can their light tales your weighty griefs o'erpower,
Or glad with airy mirth the toilsome hour?

(19)

× × × ×

Yet grant them health, 'tis not for us to tell,
Though the head droops not, that the heart is well;
Or will you praise that homely, healthy fare,
Plenteous and plain, that happy peasants share!
Oh! trifle not with wants you cannot feel,
Nor mock the misery of a stinted meal;
Homely, not wholesome, plain, not plenteous, such

As you who praise would never deign to touch.

(20)

この詩節は Crabbe の緻密な自然観察を描写した代表的な箇所であり、それは、たとえ押韻の束縛をうけてはいるが、どのような些細なことでもそのために不明瞭にしたり、混雑させたりすることなく、もれなく提示できるすばらしい機能をも兼ね備えたものである。Thomson は勿論、緻密に自然を観察していたが、そのような場合、彼は無韻詩によって極めて自由に詳細な描写をなした。ところが、Goldsmith は、不滅の韻文によって描写したオランダの風景を提供してくれたが、それは、Crabbe のものに比べて決して豊富で変化に富んだものとはいえない。Tennyson は、英国詩人中で多くの美点をこのように特別な結合のさせ方をした Crabbe に恐らく最も近い詩人といえるだろう。しかも、Tennyson は、史詩格に合せるよりも更に容易にこの種の風景に合せようとする方法をとっている。それ故、史詩格で書いた自然描写に関する限り、Crabbe は英国詩人中比類がないといえるだろう。

Crabbe の自然描写は不思議な程正確である。彼は植物学者として経験を積んだ目で草木を眺めた。彼ほど雑草から枯木に至るまで緻密で正確な描写をした詩人は外に多くを知らない。

There thirstles stretch their prickly arms afar,
And to the ragged infant threaten war;
There pappies nodding, mock the hope of toil;
There the blue bugloss paints the sterile soil;
Hardy and high, above the slender sheaf,
The slimy mallow waves her silky leaf;
O'er the young shoot the charlock throws a shade,

And clasping tares cling round the sickly blade.

(21)

Crabbe の扱った主題は人に実生活で抵抗を感じさせた時でさえも、詩としてなおも喜びを与えてくれる力をもっているというのは、美しいものは当然のこと、みにくいものでも審美的な喜びを与えてくれるからである。しかし、Crabbe の叙景詩にはもっと重要なことがあることを特記しなければならない。彼は叙景詩を唯、叙景のために描くようなことは殆どしなかった。彼は風景詩人ではないので、Hazlitt が彼を単なる画家にみなしたのは間違っている。たとえば、上掲の詩節において、彼は風景を描写するだけではなく、自然の美と、人間の苦闘に対する自然の無感覚さを対照させて描いている。彼の詩に説得力があるのは、巧みな描写とともに、風刺がよくきいているからである。貧乏人の子供達を見舞った飢餓の脅威に対抗しようとする闘争の映像と、またこの詩に表われた自然の偉業に資格を与えるむなしさと悲しみとは、この風刺が用いた手段であり、また、その実際面をとらえた描写でもある。だから、Crabbe の情景の中には人間が入っていけないものは殆どないといえるだろう。

Ⅲ 対照をなす ‘The Village’ と ‘The Deserted Village’

Goldsmith の *The Deserted Village* に用いられた格調の高い、軽妙な技法に比べると、Crabbe の *The Village* に用いられたものは、その足もとにも及ばないといってもよいかも知れない。というのは、Goldsmith のこの名作は、学童たちによって口遊され、広く国内に知れわたったのをみても、その真価は分るだろう。しかし、そこに取材された内容は平凡で感傷的で、時には軽薄なところさえみられる。いま、その両方の作品を比べてみよう。

Sweet Auburn! loveliest village of plain,

Where health and plenty cheered the labouring swain,
Where smiling spring its earliest visit paid,
And parting summer's lingering blooms delayed:

(22)

Goldsmith はこのように村の美しさをたたえ, “Auburn” をこの世の“楽園”と称し, <そこではささやかな幸福がどんな景色をも楽しませてくれた>と, 農村を自然美と人情美にみちたものとして理想化している。しかし, Crabbe はそれを全面的に否定し, 悲惨にあえぐ農村の現実を描き, 横暴極まりなき為政者の犠牲になっている農民に対して一般識者に注意を喚起して叫んだ。<そうだ。このように詩神は幸福な農民たちの苦しみをご存知なかったからである>と, 農民の共通してもつ苦悩に心をよせている。(23) そして, Crabbe は, 貧しい農民が炎天のもとであくせく働くさまと, 不運をなげくものの苦痛をかくしだてのできないことを表明して, (24) 次のように続けた。

But yet in other scenes more fair in view,
When plenty smiles——alas! she smiles for few——
And those who taste not, yet behold her store,
Are as the slaves that dig the golden ore——
The wealth around them makes them doubly poor.

(25)

また, <あれ果てた土地を耕やして無益な汗を流すのは無駄なことであろうか>, それとも, <肥沃な農地で働く農民は果して幸福なのだろうか>とも自問した。

Or will you deem them amply paid in health,
Labour's fair child, that languishes with wealth?

Go then! and see them rising with the sun,
Through a long course of daily toil to run;
See them beneath the dog-stars raging heat,
When the knees tremble and the temples beat;
Behold them, leaning on their scythes, look o'er
The labour past, and toils to come explore;

(26)

酷暑の長い一日を働き続ける農民で健康に恵まれたものがあるだろうか。Goldsmith の美しい村は、Crabbe にとっては、かつての理想の村であって、それが富裕なものたちの贅沢なくらしのためにあらされているのを回想して引き合いにだしたのが上述の引用詩節である。しかし、このような Goldsmith の作品から受ける感じは、決して心にむなしさを覚えるような村落ではなくて、美しい、健全な田園である。そこに表われている Goldsmith の牧歌的な非現実的な態度を Crabbe は不満に思うのであった。Crabbe は想像力を逞くして農村を創作したのではなく、自分自身の体験によって実感した農村の疲弊と困窮と罪惡とを教養豊かな人々に紹介して農村に対する認識と理解とを求めた。彼が村で起きた家庭の不祥事を描いたのもその一例である。

ところが、Goldsmith は、農村生活を描く場合、自分の農村生活を背景として、富者の贅沢と、利己主義が益々増大していくのをみて、彼自身で予言した農村の人口減少と百姓生活の墮落とを対照させて、理想的で幸福な、裕福で、しかも、天真爛漫な農村社会を描写するのが彼の目的であったが、Crabbe はそれとは違った態度をとった。彼の場合は、自分で身近く接触していた農村の罪惡と悲惨事——それは社会の心臓部で絶えず活動していることが原因となって起きたもので、外部から人をおしのけようとする攻撃によるものではない——に関して憐憫の念を起させることをねらったのであった。例えば、Goldsmith

は、Chaucer の“町の貧乏牧師”を手本にして、信心深い、謙遜な、しかも、その教区民に絶大の美德を施す村の牧師を描いて不朽のものとした。

Thus to relieve the wretched was his pride,
And even his failings learned to virtue's side;
But in his duty prompt at every call
He watched and wept, he prayed and felt for all.
And as a bird each fond endearment tries
To tempt its new-fledged offspring to the skies,
He tried each art, reproved each dull delay,
Allured to brighter worlds, and led the way.

(27)

ところが、Crabbe は少年の頃に出合った、これとは違った型の牧師を思い出して、それを作品にとりあげている。紛れもなく写実主義の手法で、村の不潔な、荒廃しきった救貧院を描きだした。

There children dwell who know no parents' care:
Parents, who know no children's love, dwell there.
Heart-broken matrons on their joyless bed,
Forsaken wives, and mothers never wed.

(28)

この“未婚の母”が社会問題として大きな示唆を与えたのは当然のことであろう。たとえ、これが救貧院でのできごとであったことからいえば、外のどこの町にも普通に見られたことであるが、*The Deserted Village* には、このような悲劇は描かれていなかった。また、Goldsmith の村には＜年収40ポンドという高額所得＞の出世牧師がいるけれども、Crabbe の村では臨終の床に横たわ

る貧者のもとに最後の祈禱を求めて迎えられた狩猟家牧師は決してこれと比べられる程のものではなかった。

And doth not he, the pious man, appear,
He, “passing rich with forty pounds a year?”

(29)

そして、現実の村にいた牧師は全くそれとは違ったものであった。

A sportsman keen, he shoots through half the day,
And, skill’d at whist, devotes the night to play:

(30)

この牧師の年収に関して、Crabbe は *The Parish Register* にもとりあげている。ここに表われた牧師は *The Village* の教師より幾分平和で穏やかな生活を味わってはいるが、村自体の環境は決して豊作と健康に恵まれた Goldsmith の描いた Auburn やエデンの楽園ではなく、牧師の仕事も村の戸籍簿の事務管理にすぎなかった。

Is there a place, save one the poet sees,
A land of love, of liberty and ease
Where labour wearies nor cares suppress
Th’ eternal flow of rustic happiness? ...
Vain search for scenes like these! no view appears,
By sighs unruffled or unstain’d by tears;
Since vice the world subdued and waters drown’d,
Auburn and Eden can no more be found.

(31)

もしも、Goldsmith がその作品を書いた当時、Lisoy に帰っていたならば——実際は帰っていなかったのであるが——Aldeburgh と全く同様なものを見ていたかも知れないだろう。土地は恐らく、Aldeburgh よりも豊沃であったに違いないが、その農民は労働と病気と老齢と貧困のために苦しみ、悩み、その上、飲酒を始めとする幾多の罪惡につきまとわれた結果、必然的に不幸な目にあっていただろう。ところが、作品にとりあげられたくうるわしの Auburn>とは喪失以前の Eden のことである。Goldsmith は自分の想像力で記憶していたことを作中に生かしたようである。しかし、たとえくうるわしの Auburn>の中に、想像できる要素があるとしても、それは記憶のために多少は真実であるかも知れない。あるいは想像力が記憶にふれ、それを解明するまでは、真実らしいものであるのかもしれない。過去は余りにも変ってしまっているので、人生において最も有力で効果のあるものの一つであるとはいえないだろうか。そして、またこのことは、記憶に影響を及ぼしている想像力がより深遠な真実を見出したことを意味しているとはいえないだろうか。それは観察の場合にも同様のことをするわけにはいかないだろうか。また、してはならないだろうか。そうした場合、事実に対してその価値をかえる新らしい見透しがきくようになるのである。それには事実をよく見直してそれを確かめなければならない。

さて、ここに立派な町になっている Auburn をふり返って見ているものがいた。それは、美しい町でもあった。親切な人々、賢い老人や高貴な老婆たちがたくさんいたし、気のやさしい、背の高い青年たちや、立派で賢い女中たちもいた。その町にはいくつかの大公園があって、そこには見知らぬ国々からきた世にも不思議な珍しい植物が一杯に茂っている温室のあるすばらしい植物園や、無尽蔵の珍品、剥製の鳥類、模型の蒸気船等の陳列されている博物館があった。そこでは特に子供達が優遇され、年々、その数も増えていった。また、その町には大商店が店を連ね、電車も走っていた。それ自体が魅力と幸福にみ

ちあふれた場所であった。ところが、今日では Clyde 河畔の雨の町として知られてはいるが、工場の煤煙ですっかり汚染されてしまったので、これが果して、かつてのあの美しい町であったといえるだろうか。しかし、確かにあの昔の町であったし、また、今の町でもある。というのは、子供たちは、中年のものたちが見落しているものを見ているからである。Crabbe は中年の初期であったが、Goldsmith は最後まで子供であったので、幸福という最少のきらめきによつて理想化する光りを自分の中に備えていた。Lissoy には飲んだくれの夫や、けんか好きな女房たちがいたようであるが、若い Goldsmith は彼等の他の面しか見なかった。どんなにいやらしいものたちでも子供たちには親切であったが、この親切心こそ、彼等の性質の中で最も顕著な特徴であるといえるかも知れない。くささいで、誰にも知られていない、忘れられた親切心と愛の行為は、悪人でさえも生れながらに与えられている賜物である。*The Village* は全部が事実であるが、全部が真理とは限らない。人生は極めて不幸で、苦しくて、貧乏で、飢餓に瀕したり、苦役と不親切にみちたものであるかも知れないが、人はどこにいても寛ぐことができるし、全てにうち勝つこともできる。だから、たとえ幸福をみいださなくても、その抑えきれない心は、よくそれを、少くとも他人のために作りだすものである。従って、もしも、自分自身でそれをみいださなければ、おかしいことになるのである。

Crabbe が *The Village* で描いた老人は、医者と牧師から見捨てられて死んだ時、村の子供たちはしばらく遊ぶのをやめて、弔意を表した。

To see the bier that bears their ancient friend
For he was one in all their idle sport,
And like a monarch ruled their little court;
The pliant bow he form'd, the flying ball,
The bat, the wicket, were his labours all.

Aldeburgh が“未開の Altama”より近くにあることが分ったので、この老人は恐らく、Auburn からアイルランドの移民になるようなことはしなかったのだろう。とにかく、Goldsmith は＜百姓の子＞ではなかったのも、彼には＜あばら屋＞の内部のことは殆ど分っていた筈がないのである。

IV あいまいな **Diction**

Blake が英国詩の解放を花々しく提唱し始めた頃、Crabbe は依然として自分の詩作には既に廃れた旧来の語法をとりいれていた。その詩法に用いた英雄史格は韻律においては祖先伝来の修辞学的創案に則り、また、その詩作に表われた擬人化した抽象概念には、まさに注目に値するものがある。*The Village* において、Crabbe は普通名詞や抽象名詞を固有名詞として用いているが、それは自分勝手に擬人法にしてしまったのか、あるいは単なる抽象的概念として扱ったのか、混乱してしまって、よく考えるだけの余裕がなかったのかも知れない。あるいは遠廻しのいい方が彼にとっては必要な補飾であったのかも知れない。また抽象概念を擬人化することが、散文作家と違って詩人に与えられた特権の一つであったからでもあろう。彼の採用したこの独特な語法は、19世紀の始め、彼が文学活動を再開するまですたれることはなかった。

Crabbe が *The Village* の中で＜言葉の花＞として好んで用いた隠喩には、少女のことを＜maid＞または＜nymph＞⁽³³⁾、農夫のことを＜swain＞⁽³⁴⁾、詩人のことを＜sons of verse＞⁽³⁵⁾ といい、魚のことを＜finny tribe＞とよび、いなかの人々を称して＜rural tribe＞⁽³⁶⁾ というようなものがある。

また、Crabbe の用いた詩行中の対照法にも妙味がある。次の例では形容詞と名詞が均整をとって配列されてある。

For no deep thought the trifling subjects ask

(37)

このほかに頭韻を用いて対照の効果を最高度にあげているのが次の詩行である。

They boast their peasant’s pipes; but peasants now.

(38)

The Village に扱われた主題に関して異議を申し立てることはできない。作男の人生は、この世のいつの時代でも詩の中に適当な主題としてとりあげられてきた。そこに扱われた教訓は、多少の誇張はあっても、概して当を得たものである。その詩形と用語は奇妙なほど読む人の心に満足を与えてくれるのであるが、それにしても、Crabbe はその生涯を終るまで自分の詩体が損なわれていたいくつかの欠点に無意識のうちになやまされ続けていたといわれている。彼の文法は必ずしも正確とはいえないし、また、そのいわんとするところが、あまりにもあいまいすぎて殆ど理解できない場合さえあった。例えば、次の二行連句で、

No cast by nature on a frowning coast

Which neither groves nor happy valleys boast.

(39)

その脚韻を揃えるために、boast が用いられてはいるが、これは文法的には明らかに boasts とすべきである。しかし、これは初版では、“Which can no groves nor happy valleys boast.” となっている。また、T. E. Kebbel は次の二行連句を引用して下記のようにいっている。

Or will you deem them amply paid in health

Labour’s fair child that languishes with wealth.

(40)

「この2行目の意味を正確にとられることは困難である。労働のどのような子供でも——当然そう呼ばれるものであるかも知れない——それがきれいな子供であっても、きたない子供であっても、果して富で思いなやんでいるといえるか、私には充分わからない。もしも、Crabbe のいわんとするところが、健康によつて美しくされる労働の子供が、金持ちになって怠けるなら、その健康を害するかも知れないということであるなら、第一行目の<them> は <him> とするか、あるいは2行目の<child>は <children> とすべきではなかろうか。これと同じようなあいまいな語句や不正確な用語のため、切角の威厳ある詩体をこわしてしまっている」(41) と。しかし、これには反論がある。René Huchon は、<労働の美しい子供>が単に <健康> を敷衍したものであるかどうかは明らかであるといっている。(42)

このように見解が分かれたのは Crabbe の語法のあいまいさによることは当然のことだろう。また、次の詩行においても、これに似たことがいえるだろう。

The bell tolls late, the moping owl flies round,
Fear marks the flight, and magnifies the sound;

(43)

ここの意味は明らかに<鐘は夕方近く響く>のであって、<定刻より遅れて>ではないし、また<音>は恐らく鐘の音をいうのであって、<ふくろうの鳴く音>のことではないだろう。

む す び

Crabbe は *The Village* において、幾多のあいまいな詩語法を露呈してはいるが、その詩形と用語はかえって読む人に奇妙な程、強烈な印象と満足感を与えており、しかも、彼の用いた史詩格による緻密で正確な自然描写は英国詩人中、他に類をみることができないほど勝れたものである。

Crabbe が *The Village* を出版して間もない頃、Burke の親友、Edward Shackleton が、偶々 Burke の家で Crabbe に会って彼の新作に対して最大の推賛の辞を呈したことがある。その時、彼は Goldsmith の作品は既にくさびれた村>になってしまったと宣言した。(44) ところが、Crabbe はその賛辞にすっかり面喰ってしまったが、すぐに彼のそのことばをうち消してしまった。というのは、彼には、Goldsmith のあの楽しい *The Deserted Village* は、決してくさびれない>ものであるという確信があったからである。Crabbe が英詩壇で新勢力を獲得したのは、長い間忘れられていたくあわれみ>が、センチメンタリズムの真の解毒剤となって彼の作品の中に表われたからである。読者は、きれいな空想ごとにさまたげられることなく、詩人の見せようと思っている事物の前に立たされて、その恐怖を感じるようになった。もし、Crabbe が、その詩作において、最初の偉大な現実主義者であるといえるなら、彼のリアリズムこそは、真のヒューマニズムにもとづくものであるといえるだろう。

注

- (1) Alfred Ainger: Crabbe, p. 15.
- (2) Yasuo Yamato: George Crabbe, p. 29.
- (3) *The Village*, Book I, ll. 119—130.
- (4) *The Deserted Village*, ll. 93—94.
- (5) *The Village*, Book I, ll. 15—20.
- (6) A. Ainger: Crabbe, pp. 49—50.
- (7) *Ibid.*, p. 46.
- (8) *The Village*, Book I, ll. 1—14.
- (9) *Ibid.*, ll. 43—48.
- (10) *Ibid.*, ll. 49—54.
- (11) *Ibid.*, ll. 63—64.
- (12) *The Village*, Book II, ll. 3—8.

‘The Village’ における Realism

- (13) *Ibid.*, Book I, ll. 65—68.
- (14) *Ibid.*, ll. 77—84.
- (15) *The Deserted Village*, ll. 15—23.
- (16) *The Village*, Book I, ll. 85—88.
- (17) T. R. Glover: *Poets and Puritans*, p. 225.
- (18) *The Village*, Book I, ll. 150—153.
- (19) *Ibid.*, ll. 55—61.
- (20) *Ibid.*, ll. 164—171.
- (21) *Ibid.*, ll. 69—76.
- (22) *The Deserted Village*, ll. 1—4.
- (23) *The Village*, Book I, ll. 21—22.
- (24) 注(9)参照。
- (25) *The Village*, Book I, ll. 135—139.
- (26) *Ibid.*, ll. 140—147.
- (27) *The Deserted Village*, ll. 16—17.
- (28) *The Village*, Book I, ll. 232—235.
- (29) *Ibid.*, ll. 302—303.
- (30) *Ibid.*, ll. 312—313.
- (31) *The Parish Register*, Part I, Baptism, ll. 15—26.
- (32) *The Village*, Book I, ll. 332—333.
- (33) *Ibid.*, l. 10. e. g. Their country's beauty or their nymphs' rehearse;
- (34) *Ibid.*, l. 2. e. g. O'er youthful peasants and declining swains;
- (35) *Ibid.*, l. 27. e. g. Save honest Duck, what son of verse could share
- (36) *Ibid.*, l. 26. e. g. And few, amid the rural-tribe, have time
- (37) *Ibid.*, l. 33.
- (38) *Ibid.*, l. 23.
- (39) *Ibid.*, ll. 49—50.
- (40) *Ibid.*, ll. 140—141.
- (41) T. E. Kebbel: *Life of George Crabbe*, p. 120.

‘The Village’ における Realism

- (42) René Huchon: George Crabbe and His Times, p. 485. 脚注.
- (43) *Ibid.*, p. 485. 脚注.
- (44) A. Ainger: Crabbe, p. 54.